

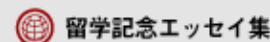
- ▶ Home
- ▶ 2013年 選考予定
- ▼ 留学記念エッセイ集

- └ 2012年留学記念

- └ 岩野仁香  
やっとスタート地点
- └ 上野理恵  
留学記念エッセイ
- └ 大宜見力  
Old IMGが獲得した  
Pediatric Residencyへの道
- └ 五反田紘志  
わが子が「帰国子女」  
に！
- └ 豊田名菜  
外科レジデンスー獲得ま  
での道のり〜スクランプ  
ルを経験して〜
- └ 伴浩和  
診断学総論
- └ 前田歩  
幸せな出産のために
- └ 村上尚加  
Physician Scientistへの道

- ▶ Nプログラム説明
- ▶ Nプログラム紹介のライド
- ▶ 参考体験記
- ▶ よくある質問
- ▶ その他
- ▶ LINK
- ▶ お問い合わせ

## 2012年留学記念 エッセイ



### やっとスタート地点

兵庫医科大学病院救命救急センター

岩野仁香

2012年7月1日より Maimonides Infants and Children's Hospital of Brooklyn 小児科でレジデンスー開始予定

### はじめに

この度、Maimonides Infants and Children's Hospital of Brooklynの小児科にマッチし、学生の頃からの夢が実現し始めました。でもこれは私が夢に描いてきた医師になるためのスタート地点に立ったに過ぎません。長い、長い助走でしたが、多くの方々からの支援と励ましの言葉を頂き、ようやくマッチに至ることができました。そして西元慶治先生を始め、N Programとの関わりがなければ、成し得なかったことだと思います。マッチングに参加した1年は、自分の努力ではどうしようもないこと、今更変えることのできない今までの振る舞いが試されること、もうがんばれない、と力尽きそうになる出来事の連続でした。どのようにして2012年3月16日（マッチデー：マッチング結果発表日）を迎えるのだろうかと緊張していましたが、実際はあっけなく、まず3月12日に「You have matched!」「ああ、そうか。」3月16日にどの施設にマッチしたかが発表された際も、実にあっけなく、「やっとスタート地点や。」と茫然としていました。

私は医学部4年生の際のテキサス小児病院での見学でアメリカの臨床教育と出会い、6年生の際にはロータリー財団の国際親善奨学生として9か月間米国カリフォルニア州立大学サンディエゴ校で学ぶ機会を得ました。2009年に関西医科大学を卒業し、兵庫医科大学病院で2年間の初期研修を行いました。そして卒後3年目は同病院の救命救急センターとCCUで後期研修を行いました。初めは純粋な米国への憧れから臨床留学を志していましたが、自分の目指す専門を小児救急と決めてからはなお一層アメリカでトレーニングを受けたいという気持ちが強くなり、準備を進めてきました。レジデンスー修了後は難関ではありますが小児救急のフェローシップに進み、いずれは災害医療や平和と紛争解決の修士号取得に挑戦する機会があればと考えています。

さて、私は経験も浅く、今から本格的な臨床トレーニングを始める身であるため、専門について日米の違いや現況を語る立場にはありません。このエッセイは私にとっては備忘録ですが、これから留学準備をされる方々が様々な障害に立ち止ってしまった時、再び前進するエネルギーを持つきっかけになるような文章になればいいなと思いながら書きました。私の性格は

「勤勉」というものからは程遠く、では逆に要領がいいかと言われるとそうでもありません。そんな私でも願ひ続けた末に手に入れられた臨床留学への切符です。今臨床留学を志している方々も、自分を信じて、最後までがんばってください。

### 臨床留学を夢見て

米国での臨床留学を考え始めたきっかけは、4年生時に母校の小児科教授の計らいで米国テキサス州ヒューストンにあるテキサス小児病院の小児消化器内科を見学をさせて頂いたことでした。お恥ずかしいことに、当時4年生で怖いもの知らずであったこともあり、「アメリカの病院を見学できる」ということ価値を全く理解していなかった私は、服装、発言、見学態度、帰宅時間など全ての振る舞いが今思うと不適切であったと思います。International Medical Graduates (IMG) という概念も知らず、United States Medical Licensing Examination (USMLE) の存在もその時初めて知りました。そして臨床留学をされている先輩方や他国からのIMGがどのような苦勞をして、病院見学のチャンスを得てきたのか知る由もありませんでした。それでも高校生のときからテレビドラマのビバリーヒルズ青春白書に熱中し、高校卒業時はアメリカの大学を受験するほどアメリカでの生活に憧れていた私はすっぴんのぼせ上ってしまい、帰国後、臨床留学を夢見て動き出したのでした。



写真1:小児消化器内科のフェローの先生と

### USMLE Step1での挫折

そんなきっかけで米国での臨床留学に向けて始動した私は5年生の半年をUSMLE Step 1の勉強に費やしました。5年生になり、大学での臨床実習が始まりましたが、実習内容は残念ながら私が思い描いていたものとは違い、自分で毎日異様なほどのアピールをし続けなければ十分量の教育を受ける機会のない日々疲労困憊しました。「今日はなんで来たの?」「することないから帰っていいよ」などの言葉を言われるたびに傷つき、「このまま医者になって、自分のやりたい医療できるんやろか?」と毎日悩んでいました。指導医の先生方の勤務体制は、学生に「職業訓練」としての教育をするには十分な時間が確保されていないと切実に感じました。その頃ちょうどCBTやOSCEなど、海外を模倣した臨床教育が始まったので、自分もいつかは日本の臨床医学教育に関わりたくと強く感じるようになりました。そしてまずは自分が進んだ医学教育を受けてみたい、と臨床留学への思いはより一層強くなりました。小児科に進むこと

は学生の頃から揺らぐことのない希望でしたが、どのサブスペシャリティーを選んでも、教育には関わりたいと考えるようになりました。出身校である関西医科大学では、小児科名誉教授の小林陽之助先生と現医学教育センター長である木下洋先生が、私の生涯のメンターとして、小児科学の知識はもちろん、小児科医としての振る舞いや、渡米計画の具現化を後押しして下さいました。NICUでの木下先生との英語の症例プレゼンテーションは、臨床実習の佳境で早朝から手に汗握る経験でしたが、毎日繰り返していくことで、英語に慣れ、また患者さんの状態も効率よく把握できるようになったことを覚えています。カルテの書き方、英語のプレゼンテーションの基礎は学生の間全て木下先生から学びました。

その頃準備不足にも関わらずUSMLE Step 1を受験し、結果として落ちてしまいました。敗因は正に勉強不足であり、周りがどのくらい準備して受験するのかといった基本的な情報も得よう

とせず、惰性で受験してしまいました。合格点に2、3点届かない点数でしたが、今思うとぎりぎりの点数で受からなくてよかったと思います。

参考：

2007年1月に大阪で受験 準備期間—約6カ月

使用した教材

Behavioral science (Board Review Series)  
 Pathology (Board Review Series)  
 Microbiology and Immunology (Board Review Series)  
 Physiology (Board Review Series)  
 Biochemistry (Lippincott's Illustrated Reviews)  
 Clinical Microbiology Made Rediculously Simple  
 Clinical Neuroanatomy Made Rediculously Simple  
 Embryology (High Yield)  
 First Aid  
 問題集—Kaplan Qbook、Kaplan Qbank、usmleworld Qbank

ロータリー財団国際親善奨学生としてカリフォルニア州サンディエゴへ

初期研修をせずに渡米することも視野に入れるようになった私は、学部6年生で1年休学し、アメリカに留学することを決意しました。ロータリー財団の国際親善奨学生として資金を得て、さまざまなボランティア活動に参加しながら、ロータリークラブの基本理念である、人道的奉仕 (Humanitarian Service)、超我の奉仕 (Service above self) を学びました。また非公式なクラクシップではありましたが、カリフォルニア州立大学サンディエゴ校付属の小児病院である、ラディ小児病院で川崎病のチームでのリサーチボランティア、現新潟大学小児科学教室教授の齋藤昭彦先生の下で小児感染症のサービスの見学もさせていただきました。大学での授業で単位取得に励む傍ら、Kaplanに通って試験対策をし直し、2008年3月の帰国直前にUSMLE Step 1を再度受験し、今度は無事合格しました。

参考：

2008年3月にSan Diegoで受験 準備期間—約8カ月

使用した教材

Kaplan Medicalのレクチャーノート、レクチャーDVD  
 First Aid  
 問題集—Kaplan Qbook、Kaplan Qbank、usmleworld Qbank、NBME



写真2:ホストカウンセラーとロータリークラブの例会にて

### USMLE Step 2 Clinical Skills受験（以下CS）、N Programとの出会い

学部6年生の夏休みにカリフォルニア州パロアルトでKaplan CSの6日間コースを受講し、その後ロサンゼルス会場でUSMLE Step 2 CSを受験しました。その頃も変わらず無鉄砲、怖いものの知らずで、Kaplanコース受講後、ほとんどの人が1-2週間は練習期間を設けるということを知らず、終了後、移動日を挟んで2日後に受験日を設定してしまいました。更に告白すると、パロアルトとロサンゼルスが近所だと思い込んでいたので、直前になって飛行機やホテルの手配をKaplanサンディエゴ校のスタッフに手伝ってもらって大慌てで行いました。当然不安にさらされましたが、なんとか受験を終えて、帰路につきました。試験結果の発表時期が大学卒業時期と重なり、Education Commission for Foreign Medical Graduates (ECFMG) との書類の行き違い、書類の紛失等、混乱が起きましたが、結局受験約1年後に合格していることを知りほっとしました。最初にN Programのことを知ったのは、このKaplanのコースの際でした。一緒にコースを受講してらっしゃった深谷絵里先生と兒子真之先生は、おふたりが調べ上げた米国マッチングにまつわるノウハウを全て惜しみなく私に伝授してくださいました。小児科に関しても、プレマッチではないが面接への推薦枠があることを知り、マッチング応募の際はN Programに助けを請うことを決意しました。結局その年に深谷先生はBeth Israel Medical Centerの内科に、兒子先生も翌年に同病院内科レジデンシーに進まれることとなり、科は違えど、いずれは3人一緒にNew Yorkに集おうと約束したのでした。この約束は私のモチベーションとなり、煩雑なマッチングを乗り越える底力となりました。またお二人と出会ってご指導頂かなければ、きっと試験自体不合格であったと思います。

参考：

2008年8月にLos Angelesで受験 準備期間—約1カ月とKaplan6日間コース  
使用した教材

Kaplan CSレクチャーノート

First Aid



写真3: Kaplanコースの最終日に深谷先生と兒子先生と

### 初期研修

気が付けば学部4年生の時から、3年、4年と渡米を目指していた私は、時に視野が狭くなり、日本にいる間はまだ何をしても自分は不完全であると思うことも度々でした。アメリカに行けないと意味がないという極論に走ってしまう自分と、目の前に患者さんがいるから自分の存在価値があるのに、そんな患者さんのいる日本を離れるのは正しい選択なのか、という葛藤もありました。それは学生のときには持ったこともない感情でした。モチベーションを保つのはも

もちろん大変ですが、医師として、人間として成長していく中で、目標をその時の自分のレベルに合わせてアップデートしていくのも容易ではないと常々感じます。

少し精神的に疲れていた私は、ずるい考え方ですが、野口医学研究所のエクスターンに行かせていただくことによって、自分のアメリカへの思いを新たにできるのではないかと期待するようになりました。

### 1カ月のエクスターンシップ

Nemours/Alfred I. duPont Hospital for Children (以下アルフレッド・デュポン小児病院)

: 07/06-07/16/2010

Children Hospital of Philadelphia (以下CHOP) : 07/19-07/29/2010

2010年7月6日からアルフレッド・デュポン小児病院のNemours Cardiac Center (以下ネモアーズ循環器センター) で見学させていただきました。朝はまず小児循環器医、小児心臓血管外科医、小児カテーテル医、小児循環器麻酔医、小児循環器フェロー、ナースプラクティショナー(NP)、ナース、ソーシャルワーカー等が一堂に会し、昨晚からの申し送りをを行います。

CICU (Cardiac Intensive Care Unit: 循環器集中治療室) から始まる申し送りは緊張感にあふれ、寸分の気の緩みも許されない雰囲気でした。積極的な参加が求められるのは知っていましたが、気後れしてしまって質問やコメントをすることができず、プレゼンテーションをメモし、後からの質問が出来る機会に備えるのに精一杯でした。

日がたつにつれて、アテンディングが私の態度に対してフラストレーションを感じていたのは察していましたが、前述のように「アメリカが私を変えてくれる」という受け身の姿勢で渡米してしまったため、それを解決する策を見いだせず辛い毎日でした。そうやってびくびくしながら

過ごし、1週目を終えてしまいました。アテンディングと夕食を頂く機会があり、先生からフィードバックを頂きました。何も言ってもらえないことが一番辛いと知っていたので、どんなお言葉に対してもお礼を述べ、good sportでいるつもりでしたが、頂いた全てのコメントがあまりにも的確で言葉が出ず、下を向くことしかできませんでした。

1週目のフィードバックを受け猛省した私は、第2週目のアテンディングのサービスの下では、発言数も増え、積極的に関わることができたと思います。回診後、NPはそれぞれコンピューターの前で追加オーダーを出したり、カルテを書いたり、外来予約の調整を行ったりしていました。私は外来に同席させて頂いたり、NPと意見を交わしたりしながら過ごしました。ネモアーズ循環器センターで行われているサービスは専門性が高く、研修医(以下レジデント)がローテーションしてくることはほとんどないということでしたが、他のサービスからのコンサルトを受けるときにレジデントのプレゼンテーションや、サービス内での役割を垣間見ることができました。

第3週目からはフィラデルフィア市内にあるCHOPのGeneral Pediatrics (一般小児科) で見学させていただきました。こちらもアルフレッド・デュポン小児病院と同様、2週間で2人のアテンディングから学ぶことができました。第1週目はアテンディングの下、午後はその日の担当に入れ替わるひとりのシニアレジデント、2人のインターン(1年目レジデント)と行動を共にしました。朝8時半から始まる回診前、6時頃からインターンはプレラウンドを行い、手書きのカルテを仕上げアテンディングが現れるのを待ちます。私がアテンディングと接するのは1日のうち、朝の回診のときだけなので、質問を用意し、積極的に治療方針に関しても意見を言うように心掛けました。私が滞在した2週間の間はひとりのインターンに3~4人ずつ患者さんがいる状況で、川崎病やクループ、吐血、血便の精査、感染性単核球症など様々な症例を経験しました。症例のバラエティーもさることながら、病床回転率の高さ、入院日数の短さは特に印象的でした。日本では往々にして、患者さん、またそのご家族は入院期間が延びることに寛容なことが多いように感じますが、アメリカでは保険制度や在宅医療の整備などの違いからか、

1日でも早く退院したいと思われる方が大多数のようです。入院4日目の回診時に「家に帰りたい。置いてきている他の子どもに会いたい。」と言って母親が涙を流す姿は今でも目に焼きついています。アルフレッド・デュポン病院と同様に昼のカンファレンスに出席した後は、インターンがオーダーを追加したり、再度病室を訪問するのに同行したりしました。光栄なことに指導医からは「あなたのコメントが要所、要所で患者さんのマネージメントを動かした」と言っていました。しかしながら見学させて頂いたチームのインターンとそりが合わず、2週間という短い期間であったため、腹を割れていないライバルという状態で最終日を迎えてしまい、不完全燃焼で終わってしまいました。また、他人が行う医療をただ見ているだけの毎日が辛かったことも重なって、大げさですが二度とアメリカなんか来たくないと人生で初めて思いました。状況をよくする努力もせず、全ての嫌なことを人のせいにして、帰国することになってしまったのです。

そして更にその年のマッチング参加を断念することになりました。理由はカリフォルニアレター（現Postgraduate Training Authorization Letter、以下PTAL）取得に挑戦してみたいと思ったことと、そもそもUSMLE Step 2 Clinical Knowledge（以下CK）を受ける目途がたつておらず、時間的余裕をもってマッチングに参加することが実質不可能であったからでした。



写真4: デュポン病院で病棟のスタッフの方々と

#### USMLE Step 2 CK受験

初めてアメリカに対して腹を立てている自分に困惑し、なかなか勉強が進まなかったUSMLE Step 2 CKでしたが、年末にかけて研修させていただいた兵庫医科大学病院消化器内科の大島忠之先生に「絶対アメリカに行くべきだ!」と強く励まされ、何とか態勢を立て直し、研修医2年目の1月末にUSMLE Step 2 CKを受験、無事合格することができました。「アメリカ行つてどないするん?そんなにアメリカがいいん?」という言葉を放ってくる人がいる中で、私の中に何かを見出してくださり、背中を押してくださる方々に恵まれていたのも本当に幸運だったと思います。常に目標をはっきりもつこと、それを叶えることで自分が満足できるかを自問自答することの重要性も大島先生にご指導いただきました。

そもそも、より良い医者になるために志したアメリカ留学。それを「もうどうでもいい」と言うことは、「もう良い医者にならなくていい」と思うこと。チャレンジをやめることは、「自分は素人で、プロフェッショナルではない」と認めること。それは絶対にあってはならないと思いました。当時私は卒後2年目でありましたが、今まで敵うはずないと思っていた現地の学生、研修医の振る舞い、知識レベル、トレーニングレベルを現時点での自分比較した結果、「十分戦える。そして戦うならば卒後5年目以内の今。」と確信しました。IMGだから、と気

後れすることなく、最大限にアメリカの臨床教育を満喫するには今のタイミングで渡米するべきだと思いました。そして以下の3つのことを心に決めたのです。まず、医療行為の行えないエクスターンはフィラデルフィアで最後にする。そして今度アメリカで病院に行くときは、医療行為を行える立場として行く。そのために、必ず来年のマッチングで結果を出す、と決意しました。

参考：

2011年1月に大阪で受験 準備期間—約4カ月

使用した教材

Kaplan Medicalレクチャーノート、レクチャーDVD

First Aid

問題集—Kaplan Qbook、Kaplan Qbank、usmleworld Qbank、NBME

### 3年目 大学で非入局の後期研修医に。

まだ私は初期研修を終えたばかりだったので、すぐに留学準備のために常勤を辞めるには抵抗がありました。日本人の臨床留学事情をよく知る知人からは、日本での仕事を辞めてH1-Bビザで入国し、社会保障番号を得て、カリフォルニア州のプログラムへの応募準備に卒後3年目をあてるように助言されましたが、医師としての仕事がようやく波に乗ってきたと思っていた矢先であったので、なんとか日本で働きながら留学準備ができないかと模索しました。幸いにも兵庫医科大学病院での初期研修中にお世話になった同院救命救急センターの小谷穰治教授と同院循環器内科の増山理教授のご理解と、また卒後臨床研修センター長である芳川浩男先生の全面的なバックアップがあり、非入局の後期研修医として、同病院で研修を続け、面接などで渡米が必要なときは週単位のまとまった休みを取ることを許可頂きました。そのときに芳川先生から「なんであの子だけ自由に休むんや、と周りから批判されるかもしれない。でもこのチャンスはコツコツと準備を進めてきたものにしか与えられないものだ」と自信をもったらしい。」と言って頂いたことは今でも心に残っています。






写真5: 勤務先の前で尊敬する先輩と

### マッチング応募

マッチング応募を1年遅らせたことにより、応募の年（2011年）2月にはECFMG certificateを得ることができました。試験を受けながら、応募開始の9月1日に備える方もいらっしゃるのでは頭が下がります。応募するのに様々な書類が必要なので、応募開始は例年9月1日ですが、実質には5月末から6月初旬に動き出さなければいけないので、その頃まで試験対策に追われると時間と気持ちの余裕がなくなってしまうと思います。

#### ①Medical Student Performance Evaluation（以下MSPE）

Dean's Letterに代わり、医学部在学中の成績、席次をグラフなどの客観的データを用いて示すための書類です。アメリカの学生にとっては非常に重要な評価ツールであるそうですが、IMGにとってはどうなのかは定かではありません。私がマッチングに参加した2011年は、11月1日にERASにアップロードしたMSPEがプログラム側に開示されたのですが、その後面接の招待が増えることはありませんでした。準備に関しては、アメリカで耳鼻科レジデントをされている母校の先輩が資料を惜しみなく共有してくださいましたので、ある程度時間をかければ出来上がりました。アメリカではcore rotationと呼ばれる主要科だけを全学生がローテートし、その他の科は選択科として実習するのに対し、日本のクリニカルクラークシップでは短期間であっても全科ローテートする場合がほとんどですので、各科のパフォーマンスについてできるだけ詳細に書いていただくようにしました。また私の母校では各試験の席次を公表されず、Association of American Medical Colleges（以下AAMC）のMSPEの説明にあるようなグラフの作成はできないため、その旨記載しました。母校の学務課の方々も、次々と無理難題をつきつけたにも関わらず、私の目標のため、それに続く後輩のため、と快く事務処理を引き受けてくださいました。改めてこの場で心から感謝の意を表したいと思います。

#### ②Letter of Recommendation

応募年度の6月に、Letter of Recommendationをお願いするに当たり、最初の壁にぶち当たりました。頼りにしていたLetter of Recommendationの執筆者二人に断られてしまったのです。まず9か月サンディエゴobserver/volunteerをさせてもらったアメリカ人教授からは既に一度別件で推薦状を書いてもらっていたにも関わらず、「私は実際あなたのことをよく知らない。私よりもっとふさわしい人がいると思う」と言われてしまいました。もう一人は野口医学研究所を通して見学させていただいたCHOPのAttendingで、見学終了直後、帰国前に「来年の応募のために、今のうちに推薦状を用意してくれないか」とお願いしたところ、「また来年頼んでくれたら書くから」、という返事だったのですが、いざ翌年に頼んでみると、「あなたが臨床をしているところを見ていないから、推薦状を書けない」と返信がありました。一瞬途方に暮れましたが、食い下がっても質の高い推薦状を書いてくれるか保障はないだろうと助言を頂き断念しました。最終的には、唐突なお願ひにも関わらず快く引き受けてくださった方々のお陰で、予定通り計4通の推薦状を用意することができました。実際に面接を受けた際に、全てのプログラムディレクターから推薦状の内容に関して前向きなコメントをいただき、落ち着いた気持ちでマッチングプロセスを過ごすことができました。

この件に関しては、解決策は人によって異なると思いますが、参考までに私の意見を書かせていただきます。他に書いてくださる方が見つからないであれば、あてにしていた方をお願いするしかないですが、その場合内容に関して常に不安がつきまとうと思います。推薦状は具体的な点数で評価されるわけではありませんので、応募するプログラムによって評価は大きく異なります。執筆者の所属施設や役職に重きを置くディレクターもいらっしゃるでしょうし、本当にその人のことをよく知った上で書いてあるものかどうかを評価するディレクターもいらっ



しゃると思います。私の場合、2通は実際の私の病棟での振る舞いを評価して頂いたもの（内容は知る権利は放棄）、1通は私の人となり、臨床留学への取り組みを日本、アメリカ両国の医療事情をご存じの方に書いていただきました。（内容は確認させていただきました。）もう1通は現在の勤務先の教授にお願いしました。臨床に携わるアメリカ人医師からの推薦状がマストであるという認識はみなさんお持ちだとは思いますが、現在の勤務先の長からの推薦状がないのは不自然であるという助言はECFMGのIMG Advisors Network（以下IAN）を通して紹介してもらった、ナイジェリア人の小児腎臓内科のフェローの方にいただきました。非常に議論のあるテーマではありますが、最終的にはお願いする執筆者の方々に失礼のない範囲で、自分の思うstrongなletter of recommendationを書いて頂けるかを確認して、執筆をお願いするしかないと思います。蛇足ですが、CHOPを見学させていただいた際に、帰国の日程の加減で4日間しかシャドー（アテンディングの後ろについて見学すること）できなかったアテンディングには、こちらが「お願いできますか」と言い終える前に「無理です」と言われてしまいました。これほどの内容で書いていただくかという議論につながりますが、私の個人的な印象で申しますと、おそらく先輩方も同じ認識であると存じますが、最低2週間シャドーする期間がないとLetter of Recommendationをお願いする権利を得ないのではないかと思います。

### ③Personal Statementの作成

先輩方のご厚意に甘えて添削していただく他、高校生の時からご指導頂いているトフルゼミナール大阪校のネイティブの先生の有料の添削と、行き詰ったときは気分転換にインターネット上の有料サイトを利用しました。なるべくたくさんの方に目を通していただいて、ブラッシュアップしていくということと、どうしても「なぜ小児科なのか」という点と、「なぜアメリカに行きたいのか」という点をどちらも述べなければならないので、簡潔に分かりやすい文章になるよう心がけました。みなさんそうだと思いますが、ERAS登録に必要な書類の中で一番資金を投入した文書です。

### ④プログラム選び

FREIDAを基にして、有料のインターネットの検索サイトも利用しました。小児救急のフェローシップに進みたいと考えているので、できれば同施設にプログラムがあるところがいいという希望はありましたが、元々数の少ないフェローシップであるため、多くは選ばせませんでした。周囲の方々に助言いただき、自分にとってのドリームプログラム、ちょうどいいプログラム、あとは手当たり次第に出すという方針を決めました。余談ですが、単身渡米なので、聞いたことのない州は避けました。もちろんプログラムの数が増えれば増えるほど、お金もかかるのですが、後で振り返って、お金のことで後悔するのは絶対に避けたかったので、何の根拠もありませんが、最低でも100プログラムに出そうと思いました。

### ⑤ERAS登録

ERASのアカウント自体は7月頃に取得可能となり、ERAS上のCVを少しずつインターネット上で編集しました。海外でのクラークシップの経験や、ボランティア経験、ロータリー財団の奨学金など、通常のCVと同様、書けることは何でも書きました。そして2011年9月1日に計23州の126プログラムに応募しました。

### ⑥N Program予備面接・一次面接

予備面接で西元先生のオフィスを訪れた際、開口一番「今まで英語がうまい、とちやほやされて過ごしてきただろう」と言われ、驚きました。英語の発音も重視されると聞いていたので、自分のpersonal statementを大阪から東京に向かう新幹線の中で暗記し、スピーチコンテストばかりの身振り手振りで暗唱しましたが、あまり意味はなかったようです。一次面接では、当直続きで十分な英語試験対策ができませんでしたが、他の受験牛の方々と意見交換をする機会を得

て、志新たに帰阪しました。このような選考会の機会は、もちろん結果が出れば素晴らしいですが、その過程でも学ぶ点も多いと思います。一緒に受験される先生方からのインスピレーションや厳しい先生方の評価の目に触れ、自分の目標設定を客観的に見直す機会となりました。一次面接で上京した時点で9月1日に応募予定であった全プログラムへの応募を済ませていたため、例年数名N Programを通じて推薦していただけるプログラムから既にrejectの通知を受け取っていました。その旨を面接で告白した際の面接官の先生方の、とても心配してくださっている表情は忘れません。

### ⑦面接旅行

9月の2週目までに2か所、その後10月に西元先生からの推薦を頂き、更に1か所面接の招待を受けました。マッチデイを待たずにポジションを得る、プレマッチの機会を狙って、2011年11月に2週間渡米しました。面接はそれぞれ小さな違いはあるものの、全てスタンダードな形式で行われ、First Aid for the MatchやThe Successful Matchといった対策本を参考に、想定質問への答えを準備して臨みました。全てのプログラムのディレクター、面接官には手書きのサンキューカードとEメールを、その他チーフレジデントや施設案内してくれたレジデントにはEメールでお礼を言いました。ふたつのプログラムからはすぐに返信がありましたが、そのうちひとつのプログラムからは、誰からも返事がありませんでした。結果的にマッチすることとなるプログラムの面接では、どのスタッフと面接をするかは事前に振り分けられていたようで、私はディレクターと面接する機会はありませんでした。するとお礼のEメールに対して、「再度電話で話す機会をもちたい」とう返信があり、帰国後電話でディレクターとお話しました。先方からのコメントは「自分自身の強い信念があり、プレマッチは提供できないが、あなたには興味があるので、どこのプレマッチも受けずに最後まで残ってほしい」ということでした。今思えば「えらい勝手なことを言うなあ」と感じるのですが、そのときは特別な計らいをしても良かったことが嬉しかったのを覚えています。MSPE公開後も待てど暮らせどそれ以上面接は増えませんでした。理由は分かりませんが、Step 1を1回で通っていないということも効いていたのでしょうか。また3カ所のいずれも是非働きたいと思えるプログラムであったため、プレマッチについても帰国後、各プログラムに再三アピールしてみたものの、残念ながらプレマッチのポジションを得ることはできませんでした。

### ⑦セカンドルック

面接を受けた3プログラムのうち、面接後のやり取りがスムーズであった2プログラムに、米国集中治療学会のポスター発表で渡米する折に、セカンドルックに訪れることにしました。今度は自分自身が面接では見られなかった病院の側面を評価するために、各施設で1日かけて病院見学を行いました。病棟のチームにつかせて頂き、朝の回診、モーニングレクチャー、午後の診察を見学しました。レジデントの働く様子を知り、実際の研修内容について質問できたので、足を運んで良かったと思います。プログラムディレクターとも事前にアポイントメントをとって、15分くらいお話しました。再度プレマッチの可能性があるかどうかと、戦況が厳しいので是非上位にランクして欲しいとアピールしました。プログラム側は、あくまでセカンドルックはマッチングの評価内容を良くも悪くも示さないと明示していましたが、当然必ず自分の評価を上げてやる、という気持ちで臨みました。ひとつのプログラムでは午後に志願してERのアテンディングにつかせて頂き、午後6時までに約20人の患者さんの診察補助をしました。

### ⑧ランクオーダーリスト提出、マッチデイ

3月22日がランクオーダーリストの提出期限でしたが、面接を受けたプログラムのひとつはビザがH1-Bのみのプログラムであったため、USMLE Step 3の受験が終わっていない私が実質ランクできたのは2つのみで、非常に緊迫した状態でマッチデイを迎えることとなりました。各プログラムのディレクターとのメールのやり取りは心理戦で神経が擦り切れましたが、最終的

に、N Programから推薦していただき、第一志望であったMaimonides Infants and Children's Hospital of Brooklynにマッチすることができました。

### 最後に

N Programに関わる皆様、本当にありがとうございました。私の人生の中で貴重な学びの場と経験を与えてくださったことに心から感謝の意を表したいと思います。N Programとの出会いがなければ、臨床留学の夢を実現することは出来ませんでした。これからはアメリカでの研修を体験する者として若輩ではありますが、積極的に情報を発信できますよう心がけたいと思います。これからもどうぞよろしくお願い致します。

[このページのトップへ戻る](#)

Copyright (C) 2005.TOKYO MARINE NICHIDO MEDICAL SERVICE CO.,LTD.